



月報だよりの原稿は毎月20日締切、翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので、締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp宛にお送りください。折り返し、受領の連絡をいたします。

人事公募

茨城大学大学院理工学研究科理学野 助教 (女性限定)

1. 募集人員：助教（テニュアトラック）1名（女性限定）
2. (1) 所属部門：大学院理工学研究科理学野物理学領域
(2) 勤務地：茨城県水戸市
3. 専門分野：物質科学の理論的研究（広い意味での物性理論、数理物理、量子情報、情報科学、素粒子、原子核、宇宙、宇宙物質、生物物理等との境界領域を含む）
4. 職務内容・担当科目
理学部：
物理学演習I（2単位）、物理学演習II（2単位）
もしくはその他の演習科目、卒業研究。
以上の理学専門科目の概要は、大学ホームページに掲載のシラバス（<https://idc.ibaraki.ac.jp/portal/Public/Syllabus/SearchMain.aspx>）を参照ください。
理工学研究科（大学院担当資格取得後すみやかに）：博士前期課程における物理学関連の授業科目。大学院担当には理工学研究科内の資格審査に合格する必要があります。
全学教育機構：基盤教育科目等を担当いただくことがあります。
5. (1) 着任時期：令和4年12月1日以降のできるだけ早い日
(2) 任期：採用日から5年間（テニュアトラック）
テニュアトラック制とは、テニュアトラック期間満了までにテニュア（任期の定めのない雇用）に係る審査を行い、可とされた大学教員にあってはテニュアを付与、不可とされた教員にあってはテニュアトラック期間満了をもって退職する制度です。

6. 応募資格

以下の条件をすべて満たしていること

- (1) 着任時に博士の学位（外国において授与される学位で、これに相当するものを含む）を有する、もしくはこれらの学位取得が速やかに見込まれる
 - (2) 上記の主な担当予定授業科目を担当できる知識・技能を有する
 - (3) ライフイベント等の研究中断期間を除き、採用後おおむね3年以内に、大学院理工学研究科の授業、研究指導（博士前期課程）を行う資格を得ることができる研究業績を有している（資格取得のおおよその基準は、査読付学術誌に10編以上の発表論文（共著論文を含む）があること）
 - (4) 国立大学法人茨城大学就業規則第4条の2〔欠格事項〕に該当しない
本学就業規則は、以下のURLを参照
<http://houki.admb.ibaraki.ac.jp/act/frame/frame110000024.htm>
- ### 7. 提出書類
- (1) 履歴書（写真貼付）
 - (2) 研究業績リスト：「1. 著書」、「2. 原著論文」、「3. 総説」、「4. その他」に分け、それぞれ通し番号を付して全著者、タイトル、書誌情報を記載。査読の有無を明記すること。
 - (3) 主要論文の別刷：3編以内で、各一部。コピーも可。
 - (4) これまでの研究成果の概要（第一著者または責任著者になった論文を中心に主体的に研究した点を記述する）（2000字程度）
 - (5) これまでの教育実績及び学会・社会活動のリスト
 - (6) 外部資金（科学研究費など）の獲得状況と受賞歴のリスト
 - (7) 着任後の教育・研究に対する抱負（2000字程度）
 - (8) 応募者の研究業績、人物について照会できる方2名の氏名と連絡先（所属、電話番号、電子メールアドレス、国内外を問わない）
 - (9) 返信先の郵便番号・住所・氏名を明記した長形3号封筒（採否の結果の連絡に使用、切手は不要）

8. 応募締切・受け付け期間
- (1) 提出先: 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1
茨城大学理工学研究科 (理学野) 物理学領域長
阪口 真 宛
- (2) 問い合わせ先
茨城大学理工学研究科 (理学野) 物理学領域長
阪口 真
E-mail: makoto.sakaguchi.phys_AT_vc.ibaraki.ac.jp
茨城大学理工学研究科 (理学野) 物理学領域
中川尚子
E-mail: naoko.nakagawa.phys_AT_vc.ibaraki.ac.jp
※いずれも「_AT_」は「@」に置き換えてください。
- (3) 応募締め切り: 令和4年6月30日 (木) (必着)
9. 応募上の注意
封筒の表に「テニュアトラック助教応募書類在中」と朱書し, 簡易書留等で郵送してください。応募書類は返却いたしません。提出書類の記載に重大な詐称があった場合, 採用決定が取り消される, 又は解雇されることがあります。
10. その他
待遇などの詳細は, 茨城大学ウェブサイトの公募通知 (<https://www.ibaraki.ac.jp/employment/index.html>) をご確認ください。

賞の推薦

2022年度の島津賞・島津奨励賞の推薦募集

1. 島津賞候補者の推薦
わが国の科学技術振興のため, 科学技術, 主として科学計測に係る領域で, 基礎的研究および応用・実用化研究において, 著しい成果をあげた功労者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会から推薦のあった候補者を, 選考委員会が選考し, 島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。
毎年度1件, 賞状, 賞牌, 副賞500万円を贈呈します。

2. 島津奨励賞候補者の推薦
わが国の科学技術振興のため, 科学技術, 主として科学計測に係る領域で, 基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ, かつその研究の発展が期待される45歳以下(4月1日時点)の若手研究者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会および当財団関係者から推薦のあった候補者を, 選考委員会が選考し, 島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。

毎年度, 3件以下, 賞状, 賞牌, 副賞100万円を贈呈します。

- 応募方法
必要書類一式を当財団ホームページよりダウンロードして提出下さい。

島津科学技術振興財団ホームページ:
<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/award.html>

- 募集締切
島津科学技術振興財団による締切りは, 2022年7月31日(日)消印有効となっておりますが, 島津賞, 島津奨励賞の候補者については, 日本天文学会から推薦をすることになりますので, 必要書類は学会内での審査の都合上, **2022年7月14日(木)必着で日本天文学会事務局長宛**に送付くださるようお願いいたします。

- 島津科学技術振興財団 問い合わせ先
〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
公益財団法人島津科学技術振興財団
事務局 TEL: (075) 823-3240 FAX: (075) 823-3241
URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>
E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

研究助成

公益財団法人住友財団 2022年度2件の研究助成

基礎科学研究助成

助成の趣旨: 科学の進歩は社会の発展に大きな貢献を果たしてきました。科学は人類社会の未来を拓くことにつながるものです。

この助成は, 重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究, とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究: 理学(数学, 物理学, 化学, 生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの(それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。)

応募資格: 「若手研究者」(個人または研究グループ)

①国籍に関係なく, 日本の大学等の研究機関に所属し, 申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても, 日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は, 応募可能です。尚, 海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

①, ②とも申請書は、日本語または英語の記入を可としますが、英語の場合は申請書の1ページ目の研究テーマは日本語を併記、研究機関に所属している場合は、所属先の日本語で連絡または照会できる連絡担当者を、研究機関に所属していない場合は、日本語で連絡または照会できる連絡担当者（本件に対応可能な方であることを）を指定して記入してください。

尚、研究者の所属が営利企業等の場合（兼務を含む）には応募不可です。

助成金：総額1億5,000万円（1件当たり最大 500万円）

助成件数：90件程度

環境研究助成

助成の趣旨：現在、人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。

地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、生物種の減少、食料と人口、砂漠化、公害等様々な問題があり、その原因の探究と解決策の模索が続けられています。

この助成は、環境問題の解決のためには、多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え、そのためのいろいろな観点（人文科学・社会科学・自然科学）からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：

- ・一般研究 環境に関する研究（分野は問いません。）
- ・課題研究 2022年度募集課題

「ウイズ・ポストコロナ時代における環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」

応募資格：研究者個人または研究グループ

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

①, ②とも申請書は、日本語または英語の記入を可としますが、英語の場合は申請書の1ページ目の研究テーマは日本語を併記、研究機関に所属している場合は、所属先の日本語で連絡または照会できる連絡担当者を、研究機関に所属していない場合は、日本語で連絡または照会できる連絡担当者（本件に対応可能な方であることを）を指定して記入してください。

尚、研究者の所属が営利企業（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額1億円

一般研究7,000万円 1件当たり最大 500万円

課題研究3,000万円 1件当たり最大 1,000万円

助成件数：一般研究 50件程度

課題研究 3件程度

共通事項

募集期間：2022年4月15日(金)～6月30日(木)

24:00 必着

2022年度からすべてインターネットを経由した申請方式となります。

応募方法：財団ホームページから申請書をダウンロードし必要事項を記入の上、住友財団宛に送付を願います。

住友財団ホームページ

URL: <http://www.sumitomo.or.jp/>

2022年度島津科学技術振興財団 研究開発助成の募集

科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究を対象とし、原則として、国内の研究機関に所属する45才以下の新進気鋭の研究者（国籍不問）に助成します。

総額2,300万円（23件以下）。

■応募方法

必要書類一式を当財団ホームページよりダウンロードして提出下さい。

島津科学技術振興財団ホームページ：

<https://www.shimadzu.co.jp/ssf>

■募集締切

2022年7月31日(日)（消印有効）

財団事務局宛

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地

公益財団法人島津科学技術振興財団

事務局 TEL: (075) 823-3240 FAX: (075) 823-3241

URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>

E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

会務案内

日本天文学会 2022年春季年会報告

2022年春季年会は、3月2日(水)から5日(土)の4日間、広島大学（東広島市）にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し、完全オンラインでの開催とした。講演件数は口頭講演が461件、ポスター講演が73件で、合計534件の講演があった。年会参加登録人数は会員1,141名、非会員118名の計1,259名であった。以下に報告するように、

天文教育フォーラムもオンラインで開催された。四回日のオンライン開催であったが、参加者の皆様のご理解とご協力により、大きな問題なく開催することができた。

座長は次の50名の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する。(敬称略)

| | 3月2日(水) | | 3月3日(木) | | 3月4日(金) | | 3月5日(土) |
|---|--------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|
| | 9:30-11:40 | 13:00-15:10 | 9:30-11:40 | 13:00-15:10 | 9:30-11:40 | 13:00-15:10 | 09:30-11:40 |
| A | コンパクト天体 海老沢研 (JAXA) | コンパクト天体 木坂将大 (広島大学) | コンパクト天体 坂本貴紀 (青山学院大学) | コンパクト天体 仏坂健太 (東京大学) | 活動銀河核 紀基樹 (工学院大学) | 活動銀河核 笹田真人 (広島大学) | 活動銀河核 泉拓磨 (国立天文台) |
| B | 観測機器 (電波) 亀谷收 (国立天文台) | 観測機器 (電波) 西村淳 (国立天文台) | 観測機器 (電波) 岩井一正 (名古屋大学) | 観測機器 (電波) 赤堀卓也 (国立天文台) | 観測機器 (X・γ線) 米田浩基 (理化学研究所) | 観測機器 (X・γ線) 岩切渉 (中央大学) | 観測機器 (X・γ線) 玉川徹 (理化学研究所) |
| C | 銀河 村岡和幸 (大阪府立大学) | 銀河 今西昌俊 (国立天文台) | 星形成 安井千香子 (国立天文台) | 星形成 大朝由美子 (埼玉大学) | 星形成 下西隆 (新潟大学) | 星形成 岩崎一成 (国立天文台) | 星形成 高棹真介 (大阪大学) |
| D | 太陽 鳥海森 (JAXA) | 太陽 久保雅仁 (国立天文台) | 太陽 飯島陽久 (名古屋大学) | 太陽 西塚直人 (情報通信研究機構) | | | |
| E | 星間現象 元木業人 (山口大学) | 星間現象 阪本成一 (国立天文台) | 星間現象 林克洋 (JAXA) | 星間現象 信川久実子 (近畿大学) | 惑星系 荻原正博 (李政道研究所) | 惑星系 國友正信 (久留米大学) | 惑星系 福井暁彦 (東京大学) |
| F | 原始惑星系円盤 片岡章雅 (国立天文台) | 原始惑星系円盤 藤井悠里 (京都大学) | 原始惑星系円盤 古家健次 (国立天文台) | 観測機器 (光赤・重) 渡邊誠 (岡山理科大学) | 観測機器 (光赤・重) 土居守 (東京大学) | 観測機器 (光赤・重) 大藪進喜 (徳島大学) | |
| G | 銀河形成 井上昭雄 (早稲田大学) | 銀河形成 嶋作一大 (東京大学) | 銀河形成 松田有一 (国立天文台) | 銀河形成 児玉忠恭 (東北大学) | 銀河形成 田中賢幸 (国立天文台) | | |
| H | 銀河団 / 宇宙論 三石郁之 (名古屋大学) | 宇宙論 西澤淳 (名古屋大学) | 教育・広報・他 生田ちきと (JAXA) | 教育・広報・他 内山秀樹 (静岡大学) | 恒星進化 山村一誠 (JAXA) | 恒星進化 前原裕之 (国立天文台) | 恒星進化 諏訪雄大 (東京大学) |

〈記者会見〉

日本天文学会2022年春季年会記者会見は、年會前日の3月1日(火) 13:00からオンラインにて開催された。山本会長による挨拶に始まり、日本天文学会の組織と活動の概要、今春季年會の紹介を行った。その後、年會研究講演から下記の3件についての詳しい学術発表を行った。当日は報道機関から6名の参加があった。メディアでの紹介は、印刷版、オンライン版合わせて3月18日現在で、少なくとも7件の報道を確認している。なお、本オンライン記者会見の司会は太田副会長が務めた。

学術発表その1

重い星の誕生のようす、また一歩解明!

—W49N MCN-a: 自己重力円盤による大質量原始星への降着—

宮脇亮介(桜美林大学)、林正彦(日本学術振興会ポ

ン研究連絡センター)

学術発表その2

超解像画像から見えてきた巨大ブラックホールジェットのらせん状運動

笹田真人(広島大学)、福満翔(東京大学/国立天文台)

学術発表その3

アルマ望遠鏡、129億年前の銀河から窒素と酸素の電波をとらえる

但木謙一(国立天文台/総合研究大学院大学)、辻田旭慶(東京大学)

第4回(2021年度)日本天文遺産(2件)

「明治7年金星太陽面通過観測地(長崎県長崎市、兵庫県神戸市、神奈川県横浜市)」

「小山ひさ子氏の太陽黒点スケッチ群」

松村雅文（香川大学）

第4回（2021年度）天文教育普及賞

「上越天文教育研究会と上越清里星のふるさと館」

「名古屋市科学館天文指導者クラブ（ALC）」

「山田義弘氏」

土居守（東京大学）

（太田耕司，生田ちさと）

〈林忠四郎賞・研究奨励賞・欧文研究報告論文賞受賞記念講演〉

年会4日目の3月5日13:30から，2021年度林忠四郎賞，研究奨励賞，および欧文研究報告論文賞の受賞記念講演が行われた。講演者および講演タイトルは以下のとおりである。

林忠四郎賞受賞記念講演

千葉 紘司（東北大学）「銀河考古学および銀河のダークマターの研究」

研究奨励賞受賞記念講演

堀田英之（千葉大学）「太陽内部の乱流と磁場」

Kenneth Christopher Wong（国立天文台）「Measurement of the Hubble Constant from Lensed Quasars」

稲吉恒平（北京大学）「超巨大ブラックホールの形成過程と将来観測に向けて」

欧文研究報告論文賞受賞記念講演

井上剛志（甲南大学）「衝撃波による大質量星形成誘発機構」

橋本拓也（筑波大学）「Big Three Dragons: Az=7.15 Lyman-Break Galaxy Detected in [O III] 88 μm , [C II] 158 μm , and Dust Continuum with ALMA」

〈天文教育フォーラム〉

会期2日目の16時30分から18時まで，日本天文教育普及研究会との共催にて天文教育フォーラムが開催された。今回もコロナ禍によるオンライン開催となったが，Zoom ミーティングには総数123人もの聴衆にお集まりいただいた。

今回は，「天文教育普及における評価研究手法」をテーマとしての開催であった。天文学に関わる研究者や教員，科学コミュニケーターにとって教育普及の効果を測定・評価し，報告すべき場面は多く存在する。しかし，教育普及の実践をどのように評価するかは簡単ではない。学習者の意見を集めるアンケート調査は比

較的簡便であるが，単純なアンケート調査などだけに頼っている，肝心の学習者の理解や学習過程の内面に迫ることは難しい場合もある。計量的評価・研究と並んで，少ないサンプルを深く掘り下げる質的な評価・研究手法が役に立つ場面もあるだろう。そこで，今回の天文教育フォーラムでは，天文教育研究の現状を確認するとともに，特に我々に馴染みの薄い質的研究も含めて，教育効果を評価し研究する手法を考える場としてフォーラムを企画した。

当日は，天文教育普及分野での研究面にお詳しい縣秀彦氏（国立天文台）に，日本における当該分野の現状をレビューして頂いた。天文教育普及に関連する論文で取られる手法の分析や，天文学会年会における教育セッションでの発表傾向や論文出版傾向についてご紹介頂いた。その上で，天文教育普及の中心的学術雑誌を育てること，天文教育普及に関する活動の評価軸を確立することの重要性を提言された。ついで，教育研究における質的研究法の専門家でありしる香月裕介氏（神戸学院大学）に「教育研究における質的研究の活用」と題してご講演頂いた。教育学研究者の立場から，質的研究を含めた教育研究に関する手法および活用についてレビュー頂いた後，教育研究の大まかな展開，質的研究の紹介，質的研究の実際を実例を交えてご紹介頂いた。

招待講演後には，参加者を含めた議論が行われ，会場からの質問や意見に対し，招待講師の方々から丁寧なお答えを頂いた。本フォーラムをきっかけに教育普及研究が充実したものになれば幸いである。

（玉澤春史，富田晃彦，鷹野重之）

〈ジュニアセッション〉

第24回ジュニアセッションを，3月19日（土）にオンラインで開催した。今回の春季年会は3月2-5日に設定されたが，この時期は期末試験等の学校行事との干渉が懸念されたため，初めて年会と異なる日程での開催となった。周知が不十分だったことをお詫びする。昨年はコロナ禍の影響で発表数が若干少なかったが，今回は60件とほぼ一昨年のレベルに回復した。発表形式の内訳は，4分間の口頭発表とポスターの組み合わせが40件，1分間のショートプレゼンテーションとポスターの組み合わせが14件，ポスターのみの発表が6件であった。口頭講演には，タイの高校生による発表6件が含まれている。今年に入ってから新型コロナウイルスが猛威を振るい，生徒たちの研究活動も大きく影響を受けた。残念ながら3件の発表がキャンセルとなってしまったほか，各発表者・指導者は部活動制限等の厳しい状況下で，相当苦労されて発表準

備を進めたようである。十分に活動できなかった生徒たちの無念は想像に難くないが、将来に期待したい。

昨年に引き続き2年目のZoomを用いたリモートセッションであったが、この1年間での参加者のリモート会議ツールへの習熟は大きく、事前の練習会によるリハーサルの効果もあり、大きなトラブルはなかったようである。当日は山本会長の挨拶に始まり、午前、午後それぞれ約2時間の口頭発表セッションが行われた。座長は午前中が小菅京（東京工業大学附属科学技術高校）、成田憲保（東京大学）、午後は宮本英明（巣鴨中学高等学校）、泉拓磨（国立天文台/総合研究大学院大学）の皆さんにお願いした。1件4分間の口頭発表におけるトラブルを回避するため、昨年同様発表は事前収録したものを再生し、その後質疑応答を行う形とした。結果的にほぼスケジュール通りの進行ができた。また、今年は新たな試みとして、ポスターセッションを、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて実施した。3~4件の発表を一つの部屋に割り当て、その部屋の中では自由に議論出来るようにした。部屋によって若干参加者数に偏りがあったものの、おおむね活発な議論が行われたと考えている。その場での議論に加え、オンラインでのコメントも収集しており、4月上旬に発表者宛に送付した。

学校等で1台の端末から複数人が参加することもあり、正確な参加人数は把握出来ないが、同時接続数で最大200件強、運営関係者も含め約300件ほどの接続があった。のべ発表者数が281名、研究者・教育関係者などそれ以外の接続が125件であったので、総参加者数は約400名と推定している。

事後に行われた発表者、聴講者へのアンケートによれば、Zoomを用いたセッションは、各参加者も大きな問題なく参加出来たようである。オンラインでのポスターセッションについては、部屋によって議論の密度に差があったようで、運営上の改善点を指摘する声があったが、やはり各発表個別に密な議論が出来たことについては参加者の満足度も高かったようである。一方、新型コロナウイルスの影響により、十分な活動が出来なかったことが改めて確認された。

ジュニアセッション実行委員会では、引き続き今後想定される現地開催・リモート開催・ハイブリッドの形式に柔軟に対応し、かつ効率的な運営方法を検討していく。ジュニアセッションでは、例年参加者同士またプロの研究者との深い議論を行うことで、生徒たちのみならず指導する先生方も強い刺激を受けて、天文学研究への理解と研究力向上につながってきた。引き続き天文学会会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

最後になったが、本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会が共催、日本学術会議が後援した。参加者およびご協力いただいた関係各位に篤く御礼申し上げる。

（山村一誠）

〈公開講演会〉

年会最終日の翌日3月6日(日)の13:30から16:00過ぎにかけて、「広島で育まれた天文学」と題して、Zoomウェビナーによるオンライン形式の公開講演会を開催した。当初は、対面開催とのハイブリッド形式を予定していたが、現地のコロナ禍の収束が遅れたため、開催3週間前に、止む無くオンラインのみの開催とした。講師は、加藤一孝氏（比治山大学）、野村真理子氏（呉工業高等専門学校）と水野恒史氏（広島大学）の3氏であり、天文教育理事の富田晃彦氏（和歌山大学）の司会により進行された。冒頭で、会長の山本智氏（東京大学）から挨拶がなされた後、開催地理事である深澤泰司氏（広島大学）から、趣旨説明と講師紹介が行われた。

講演では、まず加藤氏が「広島と天文の関わり」と題し、広島におけるアマチュア天文界の歴史に関する紹介に加え、広島市こども文化科学館プラネタリウムの設立や、広島県内に落下した火球・隕石の調査等について、氏の経験を交えて楽しい解説をされた。ひろでんの被爆電車に関する著書も出されている氏から、被災直後の広島市内の写真がいくつか示され、その中に荒れ果てた広島大学キャンパスを背に、凜とそびえ立つ「理論物理学研究所」の正門の写真があったのは個人的に感慨深かった。次に、野村氏が「数値シミュレーションで迫る超巨大ブラックホールの姿」というタイトルで、ブラックホールの特徴やその周辺で引き起こされる現象を説明された後、最新の数値シミュレーションによる超巨大ブラックホールの形成過程や周辺ガスの激しい活動性に関する理論的研究についてわかり易く解説をされた。最後に、水野氏が「人工衛星で探るブラックホール」と題して、ブラックホールの観測にはX線・ガンマ線が適していることや、地球大気中で吸収されるため上空から人工衛星などで観測することなど、ブラックホールとその観測の進展について丁寧に話されたあと、近年の超小型衛星を用いたプロジェクトやX線偏光観測についても紹介された。

講演ごとに質疑の時間を設け、ウェビナーのQ&A機能で視聴者に質問を募り、そのうちいくつかを現地ウェビナーホスト担当の植村誠氏（広島大学）がピックアップして、講演者に司会者と掛け合いながら回答して頂いた。また、すべてのQ&Aを事後に質疑応答

集としてまとめ、学会の年会係にお願いして、公開講演会のホームページに掲載して頂いている。理論研の表札がなぜ綺麗に残ったのかや、ブラックホールの中がどうなっているか、複数の小型衛星で観測することで高い位置精度が得られる理由など、率直な質問が複数寄せられた。

最終的な参加者は約100名で、うち54名から参加者アンケートの回答が寄せられた。いずれの講演についても、「大変満足だった」と及び「満足だった」が8割以上に達しており、視聴者の満足度が高かった様子がうかがえる。また、今回のオンライン形式の講演会に対し、「とても快適に行われた」と「快適に行われた」が合わせて98%で、不満に感じたと答えた参加者はいなかった。参加登録時の統計をみると、視聴者は北海道から九州まで全国に広がっており、広島県内の視聴者は4割ほどであった。今後、対面開催が再開されていくものと思われるが、地方で行われる講演会に対してどこからでも気軽に視聴できるメリットはオンライン形式ならではのあり、運用も至ってスムーズ行われていると実感できたことから、オンライン併用のハイブリッド開催を基本線とすることを検討しても良いのではないだろうか。

(川端弘治)

(年会実行委員長: 古澤久徳)

講演登録費・年会参加費の改定について

2021年6月12日に開催された代議員総会にて、正会員の会費と、正準会員の年会参加関連費(年会参加費と講演登録費)が改定されました。本改定は、両者のバランスを考慮しながら年会事業関係の収支の健全化を目的にしたもので、既にご連絡した2022年度以降の会費改定(天文月報2022年1月号参照)に続いて、2022年秋季年会から講演登録費・年会参加費の改定についてもご連絡します。

講演登録費(会員)は3,000円から2,000円に、企画セッションで一般講演を行う非会員の講演登録費は10,000円から5,000円に変更になります。また、年会参加費は講演の有無によらず5,000円(学生会員は2,000円)となります。ただし、企画セッションで基調講演を行う非会員の年会参加費と講演登録費は免除のまま据え置かれます。詳しくは本誌の「日本天文学会2022年秋季年会のお知らせ」をご覧ください。

(会計理事 酒向重行)

入会・移籍・退会のお知らせ

2022年3月2日に開催された公益社団法人日本天文学会理事会において、正式に入会・移籍が承認された方、退会が報告された方の人数をお知らせします。

入会 正会員: 9名 準会員: 4名

退会 正会員: 0名 準会員: 6名

移籍 正→準: 14名(2022年度より)

天文月報オンラインのIDとパスワード

ID: asj 2022

パスワード: 雑誌コード(5桁の数字)とvol115(6文字)の計11文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○-▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

編集委員: 江草実美(委員長), 市川幸平, 岩井一正, 岩崎一成, 小高裕和, 小野寺仁人, 嘉数次人, 勝田哲,

川中宣太, 津村耕司, 西澤淳, 西塚直人, 秦和弘, 福井暁彦, 仏坂健太, 前原裕之

令和4年5月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円(本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359(事務所)/0422-31-5488(月報) Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会2022年(本誌掲載記事は無断転載を禁じます)